

# 一月の「中国地質報」から

岸本文男（地質相談所）  
Fumio Kishimoto

## はじめに

「中国地質報」と言っても まづ知っている人は少ないだろう。これはおそらく世界で唯一の国が発行する地質専門新聞に違いない。鉱山や鉱業についての専門商業紙なら日本にもあるが、

この「中国地質報」は普通の新聞の大きさに4ページ建て週2回の発行でありすでに発行されて980号（昨年末）現在の形式になってから364号（同じく昨年末）を数えるが国外に出されるようになったのは最近のことのようである。中国図書取扱い書店に頼れば船便で送ってくる。航空便では取扱っていない。船便のせいだろうか何回分かまとめて送られてくることがあり最新号も3週間かそこらは遅れて届く。使われている言葉はもちろん中国語である。それとて簡体字さえわかればあとは訓読みで何とか意味がとれるものだ。臆する必要はないのである。

ではこの新聞にどんなことが書かれているかの紹介を兼ねて筆者が勝手に興味をもった報道を並べることにする。なお標記の一月とは昨年一月のことである。



第1図 「中国地質報」は見事な題字で御目見得した。誰の字なのか 知りたいほど。記事も面白くて到着を待つ心境。書き方には中国独特の癖がある。その癖を癖と割り切れば 読みでもある。

## 新鉱床発見の記事

「チベットの乃東県で金鉱発見」——チベット地質鉱産局第六地質大隊は左記の県内で破砕帯の変質岩型金鉱床を発見した。その1鉱体の延長は760mを越え鉱石は銀 方鉛鉱などを伴い それらを合わせて開発する事が出来る。現在 上記の第六大隊の手で同鉱床の評価のための調査研究が進められている。

「高密県で一大重晶石鉱床の探査に成功」——山東省の第四地質隊は同省高密県の化山で大規模な重晶石の鉱床の探査に成功した。その規模は現在のところ 山東省第一である。この鉱床は同省の石油工業と化学工業に豊かな原料を提供することになる。

「海南島でカオリン鉱床発見」——海南地質鉱産局は最近 文昌県内で片状カオリン鉱床を発見し 第一次評価作業によって粗鉱鉱量を907万t 精鉱鉱量を326万tと算定した。現在 すでに精密な調査に入っている。

「湖北省西部で一大燐鉱床の探査に成功」——鄂西地質大隊は2年にわたる調査によって宜昌県内で再び大型燐鉱床の探査に成功した。この燐鉱石は質・量ともに良好で 鉱層の広がりも安定している。幾つかの地方企業がこの鉱床を開発利用に乗りだしつつある。

「江西省東北部での2金属鉱床の発見」——江西省地質鉱産局の江西東北地質大隊は最近また 同東北山地の下湖で中型の鉛・亜鉛・銀鉱床を 虎家尖で中型の金・銀鉱床を確認した。両鉱床とも地表下の比較的浅いところに賦存し 水理地質条件も採鉱条件も簡単で 交通の便も良いという特徴を備えている。

「海南島初の新砂鉄床の発見」——広東省の海南地質鉱産局は文昌県内で優秀な珪砂鉄床を発見した。現在 その評価のための調査を行っている。採取試料の分析結果によると SiO<sub>2</sub> 平均品位は99.3% 最高品位は99.8%で 良質のガラス原料になるべきものである。

「湘郷県で大型方解石鉱床の探査に成功」——湖南省地質鉱産局四一八地質隊は湘郷県内で一大方解石鉱床の探査に成功した。この方解石鉱は医薬 ペンキ ガラス 陶磁器などに使用出来る。このような 稼げ価値のある方解石鉱床の発見は 湖南省としては初めてのこと

である。

「陝西省の新発見多金属鉱床の探査進む」——西北有色金属七〇七地質探査隊は数年にわたる評価のための探査によって陝西省の銀母寺鉛床が中型の多金属鉱床であることを確認した。この鉱床は鉛・亜鉛・銅など多くの金属元素を含んだ鉱石からなり品位も高く賦存深度も浅く採鉱・選鉱ともやりやすい。すでに第七次5か年計画での重点開発対象に挙げられている。

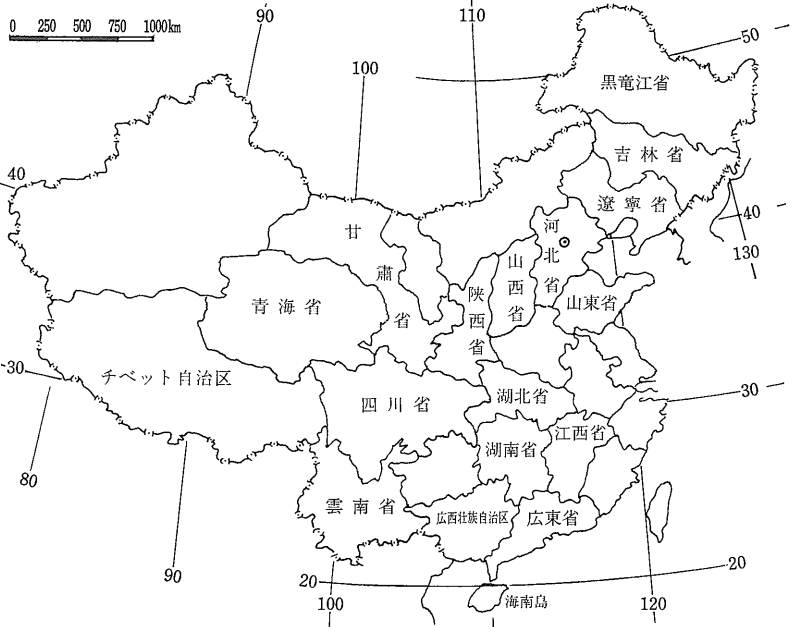
「珠海市下柵の珪砂鉱床の探査結果」——広東地質鉱産局からの報告によるとその七五七地質大隊は珠海市の下柵珪砂鉱床の補足探査によって同鉱床の珪砂の鉱量を2,700万t以上そのうちのカテゴリーBの鉱量を446万tと算定した。

「蘭北県で中型螢石鉱床を発見」——甘粛省地質鉱産局第二隊第一分隊は蘭北県一帯で地質調査を行っていた際に一つの螢石の露頭を発見し1985年にその探鉱を実施し鉱体が石英脈型でCaF<sub>2</sub>平均含有率が63%であることなどを明らかにした。

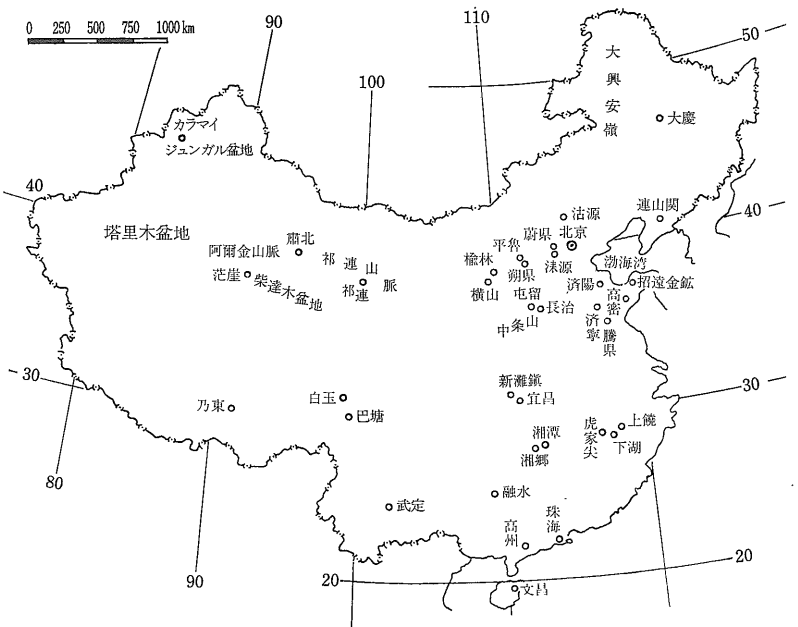
「巴塘県で発見された高品位鉛・亜鉛鉱床」——四川省地質鉱産局四〇二地質隊は最近巴塘県で中型の鉛・亜鉛鉱床を探査し同鉱床が地表下の浅いところに分布し品位が高く亜鉛の平均品位が18.28%に達し稼行価値が高いことを明らかにした。

「吉林省南部初のウラン鉱床の発見」——吉林省地質鉱産局第四地質調査所の一調査隊は1985年吉林省南部地域での地質調査中に同地域としては初めてウラン鉱床を発見した。この発見は同地域のウラン鉱床に関する空白を埋め同地域の原生代前期の堆積環境の真実を示してくれたと言える。

「高州で一大カオリン鉱床発見」——広東省高州県の沙田カオリン鉱床は広東七〇四地質大隊が数年来探査を続け最近大規模な鉱床の存在を確認したものである。鉱石は白度が高く粒度が小さく片状を示す。



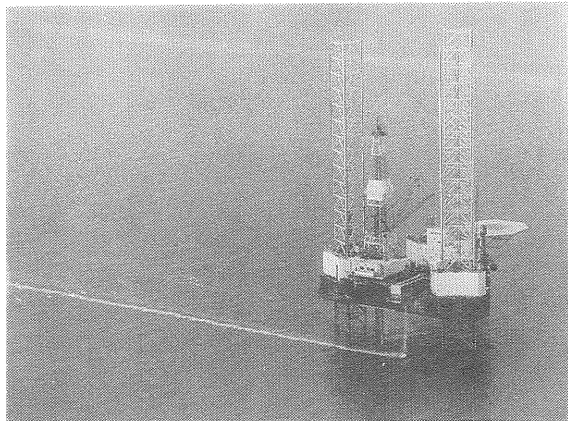
第2図 本文中にてくる省名とその位置。



第3図 本文中にてくる主な地名とその位置。

軽工業省はこの鉱床を第七次5か年計画の中で開発に入る重点対象の一つに入れた。

「涿源県における大型亜鉛鉱床の発見」——河北省地質鉱産局第六地質大隊は涿源県大湾モリブデン鉱床での既存資料の総合的な研究にもとづいて探査を実施し昨年モリブデン鉱床と共存する大型亜鉛鉱床を発見し



第4図 南中国海での石油開発が進行中。写真は北部湾（トンキン湾）中国水域の中仏共同石油開発区で作業中の自動昇降リグ。すでに 高生産性を誇る産油・ガス井2本を得ているが 原油価格の値下がりが開発にどう影響するであろうか。石油は中国にとって最大の外貨獲得商品のはず。（中国画報 1982.9）

た。その亜鉛鉱の鉱量は74万 t に達している。

「榆林—横山炭田の推定鉱量 700 億 t」——陝北炭田後背地の地質調査を任務とした陝西省地質産産局第八地質隊は 5 年にわたる奮闘によって陝西省北部ジュラ紀炭田の榆林—横山地区で新たな炭層群を発見し その推定埋蔵量を7,016億 t と算定した。これで陝西省北部ジュラ紀炭田の榆林—横山地区はオールドス炭田生成盆地の重要な構成部分となり その予測精度が非常に高かったことは 国のエネルギー政策と石炭工業の発展計画を定める上で貴重な基礎資料を提供するものとなった。中国地質産産部はこの地区を全国的地質調査事業の重点対象の一つとすることを決定した。陝西省地質産産局第八地質隊は 1981年以来このかた実施した試錐延長が総計 34,000m を越え野外地質調査面積は 5,000km<sup>2</sup> に達した。このような調査によって 初めて 同地区の地質構造の特徴 層序 可採炭層数 各炭丈 挟炭層の賦存深度と分布範囲が明らかになり 炭層集中地域の輪郭が把握された。

新発見のニュースはまだまだあるが これ位にとどめて 次に進みたい。

### 第六次 5 年計画の成果を語る

中国の国土は広い、アメリカよりも少し広く カナダよりも少し狭い。世界第 3 位に位する。その総面積は 960km<sup>2</sup> で 我が国の約 26 倍ということになる。おおまかに言って 面積が広い国ほど鉱物資源の種類が多い

という傾向がみられる。中国も 鉱物資源の種類は豊富である。ただし 鉱物資源の種類が豊富だからと言って その国のどの種類の鉱物資源も埋蔵鉱量が非常に多いと言うわけではない。中国では目下のところ たとえばクロムの鉱量が少なく タングステン・アンチモン・希土類の場合は世界一である。どこの国の政府でも 自国で大量の鉱物資源を確保したいと願うのが当然である。セラミックスの進出があるにせよ 鉱物資源は近代工業の糧なのだから その糧を外国に依存しきっている国があるとすれば その国の鉱業だけでなく 全工業の存立さえあやしくなるのだから。ただし その国がどこの国とも掛値なしの友好関係を保って行くなら話は別である。

中国も あらゆる鉱物資源の確保に努力を傾けているように見える。その一つの現れが 「中国地質報」の毎号に載っている上述のニュースであるし また第六次 5 年での鉱床探査の成果が問われ 第七次 5 年計画の達成が歌われるわけだと思ふ。

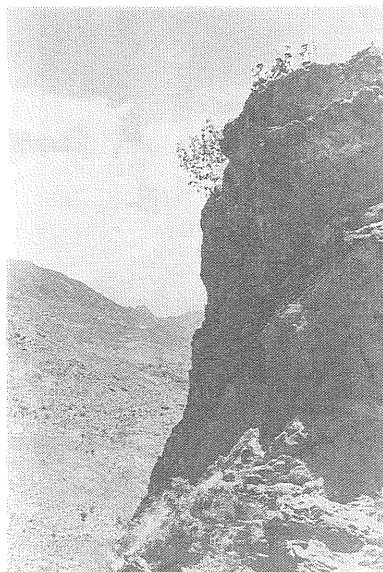
すなわち中国は今 第六次 5 年計画を終え 第七次 5 年計画の第 2 年度に入ったところである。そのため 「中国地質報」の記事は第六次 5 年計画の中での主な成果にも紙面を広く割いている。

煤炭部煤田地質局 日本流に言えば石炭省炭田地質局の場合を 同報は次のように報じている。

「統計によれば 第六次 5 年計画の期間に新たに把握された石炭埋蔵量は 1,000 億 t に達した。この値は第五次 5 年計画の 2.2 倍で その中の可採炭量は 227 億 t すなわち計画の 100.44% である。とくに蔚県 平魯—朔県 屯留 長治 ジュンガル盆地南部 竜王溝 滕県北部 濟寧などの大型炭田の詳しい調査が行われ その 17 炭田で新たに 700 億 t の鉱量が獲得された」

化工部鉱山局（化学工業省鉱山局）の場合は 「第六次 5 年計画では新たに 5,000 万 t の燐鉱の鉱量を把握することを目標としたが 実際には 3.5 億 t の新鉱量を発見し それ以外の新期待鉱量は 1.6 億 t に達した。さらに硫化鉄鉱の新鉱量増大計画量 1.2 億 t に対して 実績が 1.3 億 t 期待鉱量が 1.7 億 t 硼素鉱の増大計画量が 15 万 t で 実績が 17 万 t 期待鉱量が 12 万 t ストロニウム鉱の新たに確認された鉱量が 64 万 t 重晶石が同じく 550 万 t カーバイト用石灰石が同じく 2.7 億 t 石灰芒硝が同じく 3,500 万 t イライト鉱が同じく 220 万 t である」。

そして 国家建材局地質公司（国家建設材料局地質公社）の管轄下で新しく把握された鉱量は たとえば 「セメント用石灰灰 47 億 t（目標の 127%） ガラス用珪石 1.4 億 t（目標の 122%） 石綿 590 万 t（同 254%） 石膏 13 億 t



第5図 四川省甘孜チベット族自治州の鉍床探査を進めている人々。この地は青藏高原の東端に近く内因性の鉍物資源に富んでいる。(中国画報 1963.6)



第6図 中央美術学院の卒業制作に現れた地質調査隊員の像。砂漠に行く女性調査員の若く逞しい姿に感動を覚える。さらにこのモチーフを選んだ若い芸術家にまた地質調査員が大切な卒業制作のモチーフとなりうる事自体に敬意を表したい。(中国画報 1963.10)

(同160%) 黒鉛900万t(同860%) 滑石1,100万t(同224%) カオリン1,700万t(同1,416%) に達している」。

核工業部(核工業省)地質局管下では第六次5ヶ年計画の中で「ウラン鉍の新たに把握した鉍量は計画の100.5% 新地質鉍量は計画の130.4% 探査試錐の総掘進延長は同じく103%である。この期間にそれまでの地質隊の編成内容が改革され地質調査と鉍床探査に重点が置かれ 科学的研究面が強化された。このことによって新タイプの鉍床の探査が進展し とくに沽源県

460鉍床の発見は 華北地方における火山岩型ウラン鉍床の探査に新局面を開くものとなった。その他の地域たとえば 遼寧省連山関 山西省中条山の原生界下部系中で高品位のウラン鉍床の発見が相次いでいる。また湖南省の湘潭県 広西壮族自治区の融水県 雲南省の武定県の先カンブリア界と江西省上饒県の二叠紀砂岩中에서도新鉍床が発見されて 第七次5ヶ年計画での精密探査対象になった」。

次に 広西地質鉍産局の報告の要旨は「第六次5ヶ年計画の期間での同局に対する国の要請である マンガン ポークサイト 鉛 亜鉛 タングステン 錫 銅 アンチモン 金 重晶石など15種の鉍石の鉍量増大計画は 銅鉍床を除いて 全部が超過達成された。中でも マンガン 鉛・亜鉛 硫化鉄鉍の新把握鉍量は 計画の2倍以上に達した。とくに計画にはなかった 鉄 銀 ビスマス ゲルマニウム ガリウム 石灰石 砒鉍 粘土など10種の鉍物資源の大型・中型鉍床の探査が17か所で成功した。また チタン白の廃液から  $Sc_2O_3$  を回収する技術を開発し その工業化テストを成功裡に終了した」となっている。

そして 青海省地質鉍産局は「第六次5ヶ年計画は同局管下で10種の鉍物資源の鉍量増をとくに期待したがその中で9種のは計画量を上回った。とくに 石綿は計画を大きく突破し 新たに探査に成功した祁連県小八宝の新大型石綿鉍床のほか 茫崖県の茫崖石綿鉍床における新鉍体の発見はその新鉍量だけでも中国の10大

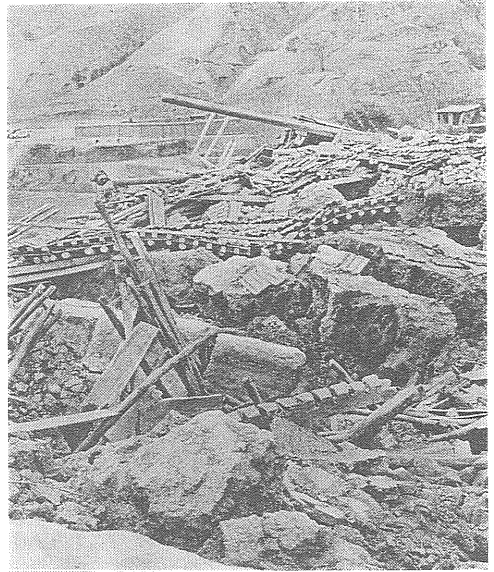


第7図 大量のウラン鉍が胎胚されている湖南省—江西省の省境周辺の丘陵地帯。その鉍床のタイプは堆積型のようである。この鉍床の発見は空中探査の結果と言う。(中国画報 1986.2)

石綿鉱床に匹敵する。現在すでに探査・確認済みの阿爾金山脈と北祁連山脈の2石綿鉱床は地質鉱量が巨大で中国の重要な石綿供給地となりつつある。銅・水銀も将来性が豊かで、金鉱床の調査結果も期待以上のものがあり、すでに新しく大きな鉱量を把握した大型金鉱床は3鉱床、新発見の可採金鉱床は21か所を数える。

最後に、石油工業部の成果の概要でこの項を終わりたい。

石油工業部（石油工業省）の報道は、次のように述べている。「第六次5ヶ年計画の間、石油の探査は、東部の石油・天然ガス胚胎堆積地に関する知識を絶えず深めるに従って、次第に石油・天然ガスの複合胚胎構造の探査に成功するようになり、基本的には、そのような地域の石油と天然ガスの分布の規則性と特徴が把握できるようになって、孤東などの埋蔵量が1億tを越える大油田をいくつか発見するに至った。西部地方では、衝上断層帯の探査に成果が上がり、ジュンガル盆地の西北部とカラマイ油田区では、そのため石油胚胎範囲が広がり、すでに開発中の油田の下部で新油層の発見が続いている。そして、ジュンガル盆地東部のクラ美麗—北三台地区のジュラ系と三疊系中で石油・天然ガス層および新たな含油トラップが発見された。中国最大の堆積盆地である塔里木盆地の南部、柯克亞地区ではすでに生産性の高い石油・天然ガス田が発見済みであり、北部でも生産性の高い産油・ガス井が得られた。柴達木盆地の古い油田でも、探査が強化されて、新たに産油量の多い油層が相次いで確認された。第六次5ヶ年計画に発見された規模の大きな石油・天然ガス集積区は30をはるかに超え、新しく把握された石油埋蔵量は第五次5ヶ年計画



第8図 甘肅省東郷族自治県の酒動山で大規模な山崩れが発生した。この写真は、その山崩れに襲われた部落の惨状。（中国画報 1983.12）

の場合よりも50%以上増大した」

### 「武装警察部隊」の金鉱探査

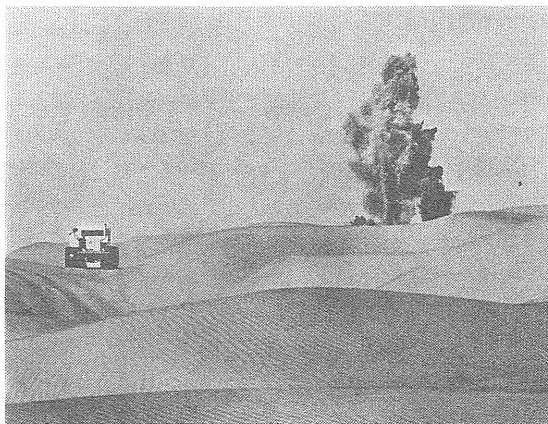
「中国地質報」の第263号（1986年1月6日付）に「武警黄金指揮部」という表題を掲げた記事が載っている。その内容は次のようなものである。

「第六次5ヶ年計画の期間、中国人民武装警察部隊の黄金指揮部の金鉱床地質調査は大きな経済効果を挙げた。

この部隊が投入した人力と資金は、上記の期間に全中国が金鉱床の調査に投じた人力と資金の1/6に相当し、全中国が同期間に獲得した可採鉱量の1/6に相当する鉱量を発見した」

中国人民武装警察とは、中華人民共和国兵役法の第4条によると、人民解放軍と民兵の中間に位する軍隊組織である。かつて、基幹民兵と呼ばれていた組織が強化されたものと思われる。その集団が鉱床探査に従っているとは愉快である。武装して命のやりとりをするよりも、金を探す方がはるかに人間らしいではないか。

この黄金指揮部の活躍について同報の第268号が掲載している記事によると、同部に所属する武装警察部隊黄金第六支隊第二連隊の指導員、すなわち連隊長の傅徳満は1982年に連隊を指揮して大興安嶺に入り、金鉱床探査の任務についた。5か月の奮闘によって黄金指揮部が



第9図 タクラマカン砂漠に轟く地震探査の発破。この大砂漠の面積は日本全域に近い。（中国画報 1985.4）

ら示された計画をはるかに上回る鉱量の金鉱(砂金)を発見し 国に一冊の報告書に提出した。彼等が発見した金鉱の鉱量は 計画値の125%であったと言う。

彼等は 毎年 金鉱の探査で計画を上回る成果を挙げてきた。1984年には 大興安嶺の八道下の人煙がまったく絶えた地へ赴いて 砂金を探査した。その時の目標は 鉱量6 t. そして同年 さらに遼寧省の古楼子で金鉱を探査し 試錐のコアから肉眼で350粒の自然金が認められる鉱層を発見し 両方で獲得した鉱量が目標の130%に達して 第二連隊全員が三等功労章を得たとのことである。

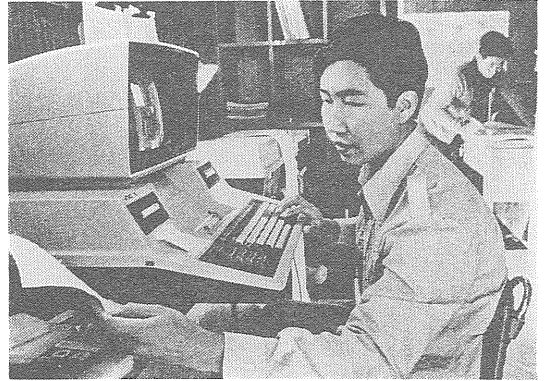
この武装警察部隊の動員とは いかにも中国らしい人海戦術である。

中国最大の金鉱山は 山東省の招遠金鉱である。これは 我が国の佐渡鉱山クラス以下と見ていい。日本よりもはるかに広大な国土を持つ中国にしては 目をむくほどの大規模な金鉱山ではない。一方 中国は今 工業 農業 科学技術 軍事の近代化を国是とし そのため 外国からの関係技術の導入に多額の資金を必要としている。したがって 中国は多量の金(ゴールド)を持たなくてはならないわけである。輸出の振興によって金を蓄積する方法もあるが その目玉商品である石油の価格の低落は金の蓄積という目的の足を引っ張っている。それなら 残された手段は金鉱業の振興であり 自国産の金の蓄積である。国是の実現のためには 中国も手段を尽すであろうが 今 中国は国内の金鉱の開発に燃えに燃えている感が深い。

人民武装警察部隊の黄金指揮部の存在やその管轄下の集団の金鉱探査は その一つの現れであろう。もう一つの金鉱業振興政策 それがこれから述べる奨励法である。

「中国地質報」の第267号(1986.1.20)には 次のように書かれている。

「金鉱鉱量奨励法 本年正式に施行」——全国金鉱床



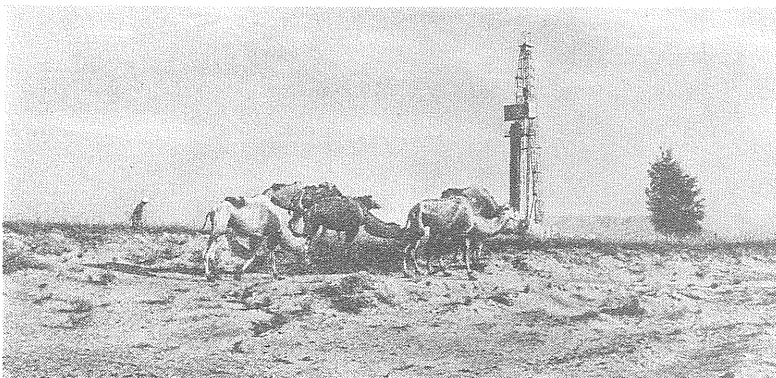
第10図 タクラマカン砂漠の石油探査の現場に設けられたコンピュータ室で地震探査データを処理する技術者(中国画報 1985.4)

地質調査・研究指導小委員会は 最近 金・銀鉱物資源鉱量奨励法を制定した。

中国は世界的にも産金大国の一つであるが 金鉱床の地質調査・研究の状況はその他の鉱種の場合に比較すると 程度が低く そのため基礎的な調査・研究を強化する必要が痛感される。しかも 短期間に金鉱の鉱量を大きく増大する必要もあるため 昨年10月国務院の関係部門は全国金鉱床地質調査・研究経験交流会を開催し 探査・把握した新鉱量の含金量1 tにつき原則として人民紙幣1万元を 外国為替では5,000米ドルをもって奨励することを一応確定した。

この原則に基づいて 金鉱床の調査・研究計画の調整に責任を負った全国金鉱床地質調査・研究指導小委員会は 金鉱探査奨励法について さらに明確な規定を作った。それは 次のようになっている。

「金だけで稼行できる鉱床の新発見鉱量の含金量1 tについて 報奨金として人民紙幣1万元 外国為替では5,000米ドルを支給すること 鉱量カテゴリーの規定による予想鉱量(筆者が思うには多分CとD)は同じく2,000



第11図  
新疆ウィーグル自治区イェチ  
ョン付近に南疆油田がある。  
写真は そのボーリング風景。  
タリム盆地は大きな油田・  
ガス田生成区か? (中国  
画報 1984.6)





第12図 雲南省端麗県の端麗江の河原に埋没した温泉湧き出し口を住民に協力して掘り出している人民武装警察の隊員たち。このような住民協力とか 金鉱の探査とか本来の仕事に専念しなくても済むということは国境が安定してきた証拠であろう。喜ぶべきことである（中国画報 1983. 8）。

元または1,000米ドルを報奨金として支給すること 50万t以上の鉱量を発見し それが0.1g/tから5g/tの随伴する金を含んだ鉱石であれば それを8段階に分け 奨励金としてt当たり200元から1万元を支給すること 銀量50t以上の銀鉱床および銀を随伴する鉱石の50万t以上の鉱量を発見した場合にはt当たり10gから400g以上を8段階に分け 1tにつき人民紙幣10元から200元を報奨金として支給すること。金鉱と金鉱に随伴する銀の報奨は冶金部黄金総公司を經由して 銀鉱と非鉄金属鉱石に金・銀が随伴する場合は有色金属工業総公司を經由して行われる。この奨励法は 本年1月1日に施行される。我が国にはこのような法律や規定が無いし 筆者の知る限り 誰一人新鉱床を発見したからといって 国から報奨金を受けた人はいない。新鉱床の発見で表彰するにしても それを行うのは民間の学術団体か協会くらいのものである。それだけに 中国のこの挙には

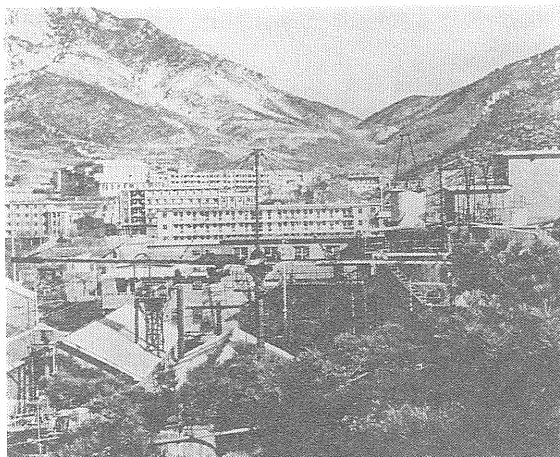
思いまた複雑である。

### 1985年の中国地質10大ニュース

さて最後に 「中国地質報」がまとめた1985年の地質10大ニュースを紹介しよう。

1) 中央書記処と國務院が共同して 地質鉱産部(部=省) 中国共産党組織の活動結果の総括報告を聴取し 地下資源をより早く開発するための基本方針 “放開搞活 管好 国家 集体 個人一起上” を提起した(この方針は“権限を広く開放し 活力を引き出し 管理をうまくやり 国・集団・個人が一体になって立ち上ろう” という意味であろう)。

2) 7月の初旬に開かれた中国地質学会鉱床調査・探査専門委員会設立大会および第一回全国学術討論会に13部門 200数10名の地質専門家が集まった。この地質



第13図

中国最大の金山——招遠金鉱。日本の山東半島占領以降 敗戦の時まで 日本の企業が経営していた。その当時の様子は光人社が出版した「華北作戦」という本に書かれている。1985年の産金量は10万両(1両=37.3g)を越えた。写真は その3採鉱区の一つ 玲瓏採鉱区の一隅(中国画報 1986. 3)。



第14図 貴州省北東部の梵浄山に行く地質調査員  
(中国画報 1982.9).



第15図 チベットの名だたる暴れ川——ヤルツァンボ河を渡る地質調査班員。  
昔ながらの藤つるの吊り橋は安全性が高い。どこの国でも地質調査には苦勞が付き物である。その反面 楽しさも倍増であるが その苦勞も楽しさも俗世間の人々には関係ないようだ(中国画報 1983.4).

専門家たちは 現在の地質調査・鉱床探査の管理体制を改革し 地質業務の管理を強め 現在のばらばらな管理の状態を根本的に改めるよう 強く求めた。

3) 地質鉱産部 石炭工業部 核工業部 冶金工業部 有色金属総公司 化学工業部 国家建材局 軽工業部の非常に多くの地質調査に従事している人々が1985年の調査と探査の任務を全面的に遂行し 第六次5ヶ年計画における各種鉱物資源の鉱量増大計画を超過達成した。新たに探査把握された鉱量の鉱種は115種に及び とくに石油マンガン 銅 アンチモン 銀の鉱量の増大量がもっとも多かった。

4) 2月初旬に地質鉱産部は 「行政の簡素化 権限の開放 仕事の活性化のための地質調査隊暫定規定」を公布した。この規定は 地質鉱産部の各部門の改革速度を早め 生氣と活力のある地質調査・鉱床探査の体制を整え 全面的に地質調査・鉱床探査の新局面を開く上で 重要な意味を持っている。

5) 10月7日に開催された全国金鉱床地質調査・研究経験交流会で 全国金鉱床調査・研究指導小委員会の委員長 朱訓は 金鉱床地質調査・探査における探鉱の奨励として探査発見鉱量の含金量1tにつき 人民紙幣1万元 外国為替では5,000米ドルの報奨金を支給する旨を発表した。

6) 1月29日 地質鉱産部の第二回表彰大会が開かれ 幾つかの地質調査・鉱床探査および地質科学研究に重要

な貢献をした機関・集団・個人が表彰され あるいは表彰と報奨金を受け 同時に労働模範として一級労働資格者に昇格した。

7) 6月12日 揚子江西陵峡の新灘鎮で大規模な地すべりが発生した。湖北省科学委員会の地すべり調査処の正確な予報によって 新灘鎮の住民1,300余名の誰一人 死亡者もなく 負傷者もなかった。

8) “大慶油田の高生産性・安定生産性を長期間維持する水攻採油技術” “焦家型新形式金鉱床の発見およびその高い探鉱効果” “渤海湾盆地の複式石油・天然ガス集積区における探査理論とその実際——済陽などの陥没複雑断層地塊での油田の場合” の3項目が第一回国家科学進歩特等賞を得た。

9) チベットの喝大克幅地区における約100,000km<sup>2</sup>の地域の野外地質調査が終わった。このことによって 中国は計画よりも5年早く 全国の1/100万広域地質調査を終了し 中国における広域地質調査での一つの重要な空白を埋めた。

10) 四川西部高原の白玉県孔隆溝で 重さ8斤4両(約4,624グラム)の自然金が発見された。これは中国でいままでに発見された自然金としては最大のもので “国の宝”と呼んでもいいほどのものである。

#### おわりに

「中国地質報」の一節は いかがでしたか? 年間に104部も送られてくる新聞であり とても紹介つくせないことが残念である。またの機会を得て 別のテーマで新情報をまとめ直して 書いてみたいと思っている。  
(おわり)